これは、とある冬の日のお話。
特になにがあるわけでもない。そんなごく普通の一日のお話。

静かだな、と海未は思った。
布団の中で、小さく寝返りをうつようにして身体を横に向ける。
カーテンの隙間から差し込む日の光が、室内をうっすらと明るく照らしていた。

いつもと変わらない、見慣れた朝の光景。
だけど、と海未はゆっくりと身体を起こした。
二、三度首を振って、意識を覚醒させる。
そうして、海未は一度開いた瞼を、もう一度ゆっくりと閉じた。
自然と研ぎ澄まされた聴覚が、自身のかすかな呼吸の音を拾う。
だが、感じ取れたのはそれだけだった。あとは、ただひたすらの静寂。
まるで時間が止まってしまったかのような静謐さに、海未はゆっくりと立ち上がる。
窓際に歩み寄り、軽く息をついて、一気にカーテンを引き開ける。

「ああ……やっぱり」
もともと、昨晩寝る前に予報で確認はしていた。
だが、こうしてあらためて窓の外に広がる景色を見て、海未はまるで自分がどこか別の国にでも来てしまったかのような錯覚にとらわれた。
「真っ白、ですね。本当に、一面の、白」
朝陽を反射して輝く銀世界、その眩しさに海未は思わず目を細める。
吐き出す息が、室内にもかかわらず白く浮かび上がる。
季節は冬。
数日前に新たな年を迎えてから、それは初めての、見渡す限りの雪景色だった。

「これだけ積もったということは……」
海未がちらり、と壁の時計に目をやる。
「どうやら、少し急いだ方が良さそうですね」
ふう、と小さく溜息をつくと、海未は洋服ダンスを開けた。
動きやすい、汚れてもそれほど気にならない服を選んで取り出し、部屋を出る。
洗面所で一通りの朝の支度と着替えをすませ、家人に挨拶をして朝食。ほとんど身体に染みついているといっても過言ではない普段通りの朝の一幕だったが、海未はどこと

なく気がはやるのを押さえられなかった。
不思議だな、と思う。
生まれて初めて雪を見たというわけではない。いやそれどころか、見たというだけなら量の多少はあれどほとんど毎年のように見てはいるはずだった。
ただその一方で思い返してみると、やはり毎年、雪の日の朝はどこか気分が浮ついていたような気もする。
見慣れた風景、それが真っ白に塗り変わる、そんな状況に、いつもと違うなにかを期待してしまうのだろうか。
ぼんやりとそんなことを考えてながら自室に戻る。時計が九時を少し回っているのを確認して、海未はニット帽を手に取った。
手袋、マフラー、厚手のコート。出来る限りの防寒対策をして、玄関へ向かう。
温度差のせいだろう、一面白く曇ったガラス戸に手をかけ、海未は一呼吸おいて一気に引いた。
「んっ……」
冷気が頬に突き刺さる。
マフラーをわずかに上げて口元のあたりを覆いながら、海未は一歩外に出た。
新雪を踏む、独特の感覚。さく、さく、という音が心地よい。
自宅の門を出たところで一度立ち止まり、左右を見渡す。
「……まだ、来てはいないみたいですね」
「来てるよ、海未ちゃん」
と、不意に背後から声をかけられ、海未は驚いて身を翻すように振り返った。
「おはよう、海未ちゃん」
「こ、ことり？　いつからそこに？」
「んー、ちょっと前かな。って言ってもまだそんなに待ってないけど」
「いえ、そうではなくて、いつの間に後ろに」
「だって、海未ちゃん全然ことりに気付いてくれないんだもん」
そう言ってことりがすぐ脇の門柱を指さす。
ああ、と海未は得心したように小さく息をついた。どうやらちょうど柱の陰になっていたせいで、視界に入らないまま通り過ぎてしまっていたらしい。
「ごめんなさいことり、私の不注意でした」
「ううん、海未ちゃんが悪いわけじゃないもの。もうそろそろ来るんじゃないかな、って気になったんだよね？」
「ええ、まあ……その通りです」
「ふふ、えっと、まず目が覚めて、しばらくお布団の中にくるまってて」
「ご家族の誰かに呼ばれてしぶしぶ起きて、部屋のカーテンを開けて」

「雪景色に気付いて、大あわてで顔を洗ったり、着替えたり」
「そして朝食を普段の倍ほどの速さで平らげて」
「すぐに家を出て、一目散に」
「途中で一度くらいは転んでいそうですが」
「それでも、お構いなしにすぐ立ち上がって、また走り出して」
「脇目もふらず、真っ直ぐに、ここに……」
「おーい、海未ちゃん！　ことりちゃん！」
　ああ、やっぱり、と海未は思った。ことりも同じだったようで、二人は顔を見合わせて小さく微笑むと、振り返って手を振った。
「穂乃果、そんなに急ぐと転びますよ！」
「もうここにくる途中に転んだから大丈夫だよ！」
　なにが大丈夫なのか海未にはさっぱりわからなかったが、穂乃果がそういうならそうなんだろう、とそれ以上深くは追求せずに納得することにした。
「おは、よ、海未、ちゃん……ことり、ちゃん！」
「おはようございます」
「おはよう、穂乃果ちゃん」
　荒くなった穂乃果の呼吸が一段落するのを待って、二人が挨拶を返す。
「雪、雪、雪だよ二人とも！」
「ええ、もう充分にわかっていますよ、穂乃果」
「こんなに積もったの、久しぶりだよね」
　三人があらためて辺りを見渡す。
　家々の屋根や庭などはもちろん、比較的車の交通量の多い道路やその脇の歩道にまでまんべんなく雪が降り積もり、それはまさに穂乃果の言うとおり、雪、雪、雪、としか言いようの無い景色だった。
「これだけ雪が降ったら、やることは一つだよね！」
　穂乃果が満面の笑みで振り返る。
　やっぱり、と二人は思った。
　べつになにか示し合わせていたわけでも、約束があったわけでもない。
　ただ、朝一番に見たこの雪景色に、ああ、とことりと海未は確信した。
　くる、と。
　家までの距離的には海未の方が穂乃果の家に近い。だからことりは海未の家の前まで来たし、海未も万全の体制を整えて穂乃果を待った。
　今日は休日。穂乃果がなにを言い出すか、二人にはわかっていたのだ。
「雪遊び、しよう！」
　高校生になろうと、スクールアイドルになろうと、穂乃果はどこまでも穂乃果だな、と二人は笑ってうなずいた。